

学生の現在——運動部から

朝の戦い

津金 毅

朝五時半過ぎ、人の気配もない緑が丘スポーツ公園にポツポツと、トレーニング姿の陸上競技部員が集まってくる。朝のトレーニングは六時に集合し、『体操』のかけ声が始まる。

朝の顔

学生の朝の顔にはさまざまな表情がある。集合一番のりを意識し意気込む顔、すでに軽いトレーニングを済ませ頬の赤い顔、眠い表情の隠せない顔、

集合時間ぎりぎりに来る焦りのある顔、いろいろな顔である。そんな朝に競技者としての心が現れてくる。調子のいいとき悪いとき、気持ちの前向きなとき、悩みのあるとき、この朝にいろいろな表情となつて現われてくる。

創部当時の集合時間は六時三十分、八名足らずの部員が集まらないときもしばしばあった。七年目を迎えた今は誰一人かけることなく集合する。集合時間も早く出る者に基準が合い、年々早くなり六時十分までになった。私も朝練には必ず参加するが、集合時間が早くなるのは、私も学生も辛い。仕事で夜遅くなる時はひとときわ辛い。朝目覚まし時計のベルの音に目がさめる。冬寢床を出て、トレーニングウェアに着替えるまでの間は、寒さ、眠さとの格闘のときだ。学生も同じように心の格闘、戦いをしながら朝の集合に出てくるのだろうか。

誘惑との戦い

朝の戦いには、前夜の消灯時間があるのいう。早く床につき睡眠時間が充分であれば、朝もすがすがしく体も自然と動いてくる。不規則な時は当然逆の形となつて現れてくる。

競技生活をするうえで、睡眠時間が充分とるという事は、一番重要なことである。しかし都会に目を向けてみると、若者の興味を誘う物は多く、いたるところに誘惑が潜んでいる。テレビ放送など若者向けの深夜番組も多く、楽しい事を追い求めれば限りなくある。経済状態の豊かな日本、競技生活をすゝめるものには大きな支えとなるはずである。ところが豊かさを誤ると、誘惑に負け大きな失敗に合う危険性がある。競技には常に厳しさが要求される。厳しさと相反する甘さ、競技に取り組む以前のところでの戦いが要求される。

かつてオツオリ、イセナも留学した当時、ケニアではめつたにお目にかかれないアイスクリームお菓子のおいしさに体重も増え、おもうように走れなかつたこともあつた。また見る物すべてが物珍しく興味をひく物ばかりで、気持ちも奪われたこともあつた。しかし自分を見失うことなく目標を達し得る事ができたのは、心の格闘の勝者と言える。

今年には幸いにして箱根駅伝に優勝することができ、故郷でつかのまの正月を過ごした部員、一月十日に集合し、十一日に五千メートルのタイムトライアル、解散時に通達してあるにもかかわらずどうも思うように動いていない。体重にも縮まりが感じられない。体重を調べてみると、オーバーしている者が多かつた。そんな気の緩み自覚の無さに、翌朝監督から喝がとんだ。『全員に、翌朝監督から喝がとんだ。』全員の体重がベストになるまで六時集

合!』……また十分早くなつた。十二月、一月は顔すらはつきりと見えない時期、誰にもきつい十分となつた。また一段と朝の戦いが要求される。

孤独な戦い

そんな朝練習に、毎朝五キロ離れた下宿から通う、二人のテスト生がいる。陸上競技部は、寮生活を基本としているため、寮に入れない者は、テスト生と呼んでいる(入部を拒否しているわけでない)。大学の近くに下宿し毎朝五時に起床、自転車で三十分。陸上部の寮につく。そこからジョギングで集合場所まで走ってくる。甲府の冬も厳しく自転車での五キロは、経験した者でなければ分からない厳しさがある。三月中旬、合宿も間近になつたころ、部員の中から『テスト生にユニフォームをあげては』という声があつた。監督も、私も異論はなく全員一致で承認した。

翌朝二人は、ユニフォームを手に入部入寮が認められた感激を全員の前で語つた。一人は頭を坊主にした四年生だ。『陸上部員として認めていただきありがとうございます。一年しか残されていませんが一生懸命がんばります。』二年間テスト生としてよく頑張つた。練習ではいつも一番後ろを走っているのが印象にある。もう一人は今年二年生、朝五時に起床し一日も休まず通い続けたことが、部員の心を動かしたのだろう。一年間の辛い朝が頭をよぎつたのか、声を詰まらせ涙ながらに『陸上部員になれて本当に嬉しいです。この気持ちを忘れないでこれから頑張ります。』彼らのひたむきな努力に心打たれた朝であつた。二人とも厳しい朝の勝者といえる。

明日への戦い

共に戦い続けた一年、箱根駅伝優勝

のゴールで、新年度のスタートが切られた。新人が加わり意気のいい顔が見える。誰にも負けまいと一番先に来る者、遠くから通うテスト生、まだ朝の厳しさを知らない顔である。今年もこの朝から戦いが始まる。

(山梨学院大学・陸上競技部長)